Editorial

経験的に研究は間違いなく誰にでも平等である

日本プライマリ・ケア連合学会 和文誌編集委員長 竹村 洋典

筆者はぎこちないので、世の中をうまく回っていくのは苦手である。それゆえに、最初からうまく立ち回ろうと思わない。正しいことは正しい、と言いがち。その結果、損をしたのかもしれないが、それを受け入れてきた。自分が正しいと思ってうまくいなくても、それは自らの思いだから、納得できる。仕方がない。

研究も同様な側面がある。研究に取り掛かる発想には、現在の社会が大きく関わることもあるが、その方略には社会は関係ない。正しい方略で実施すれば、たとえそれが社会の意に沿わないものでも、堂々と投稿すればいい。あれこれと詮索する必要など、毛頭ない。一方でそれを実施した研究者の意に添わなくても、投稿する必要があると思われる。大体、その時、研究者や社会がその研究について価値判断しても、それが正しいとは限らない。時とともに価値が変容し、その重要性や真実性が明らかになることだってある。筆者は経験済みである。また、世界中の研究者と結果を共有することで、日本において研究結果の価値がないように思えても、他国では重要であったり、他国では当然であったりすることだってある。世界中の研究者が、総合診療のエビデンスを構築するために、臆することなく、堂々と研究結果を共有すべきである。

大学にいないから研究できないという人もいるかもしれない。そんなことは絶対にない。全国にいる研究指導者は門戸を叩けば快く迎え、指導してくれた。いまだにかつて筆者が接した指導者は懐かしがってくれる。研究費がなくても、自らが頭を下げに行き、お小遣いからわら半紙を買い、輪転機(ご存じかな…)を回し、方々に行って質問票を配り、集めに行けばいい。今でこそ、疫学研究をするための統計ソフトは自分のパソコンにあるかもしれないが、筆者が若かったころは、旧帝大にしかないSAS (Statistical Analysis System) というソフトを使うしかなかった。しかし、筆者が頼みこめば使わしてくれた。かつてはPubMed、いやいやインターネットもなかったが、図書館に行って何冊もあるIndex Medicusをつぶさに検索して、該当する雑誌を見つけ出して、書き写せば関わる研究も知ることができた。または世界の査読者が、そのありかを教えてくれた。どんなに臨床で忙しくても研究する時間を捻出し、労力を出し惜しまなければいい。そして自分の研究が掲載されたときにうれし涙と共に飲む酒は美味しかった。世界の人々が笑顔でいられるためのエビデンス構築に寄与できたと思えばなおさらである。そしてたとえ掲載されなかった悔し涙の味も、今となれば懐かしい。そしてその塩辛い味が次の研究の原動力になってきた。

研究は何人にも平等である。経済的、社会的な弱者をつくらない。これっぽっちも委縮する必要などない。そして周りの人はそんな若者の足を引っ張ってはいけない。そのパワーは日本の宝物である。

何人も、夢を見つつ、全身の力を出して堂々と研究してほしい。